

学位請求論文『日本における近代中国学の始まり－漢学の革新と同時代文化交渉』の要旨

陶 徳民

本論文は、増田渉や竹内好が代表する昭和戦前期の中国学を視野に入れながら、幕末明治から大正期までの漢学と支那学、とりわけ文章学、文史論および漢文直読論といった漢文学の基礎領域における変化の主潮と諸相を素材に、日本における「近代中国学」形成の道程を検討したものである。

論文の副題を「漢学の革新と同時代文化交渉」とした狙いが、文化交渉、とくに同時代の文化交渉が漢学の革新と近代的中国研究の形成を促した主な原動力だったという認識を強調することにある。文化交渉とは、ヒト・モノ・情報の流動がもたらす刺激と反応、受容と変容の連鎖であり、国同士や地域間で行われる文化交渉の形態は一对一の場合もあれば、一对多、多対多の場合もある。日中間のそれだけでなく、東西間のそれも含まれ、しかも欧米主導の近代において、時空間の観念、研究の方法論、学問研究の制度、および文化交渉の媒介や舞台（汽船交通、活版印刷術および外国使節の首都常駐など）という物理的装置も西洋発の影響を受けざるをえなかったため、「西力東漸」や「西学東漸」などの成語で表現されているウェスタン・インパクトが確かに日本漢学のような千数百年以上の古い伝統を有する学問領域に相当深刻な影響を及ぼしていたと言える。

第一章「明治大正期における桐城派の文章論の影響」では、唐船持渡書と駐日外交官がもたらした桐城派の影響、桐城派の「族譜」に収録された藤野海南と宮島大八、桐城派の諸大家に対する亀谷省軒・重野安繹・西村碩園の評価について検討した。宋代の「江西詩派」とともに中国文学史上における二つの最大のグループに数えられる清代の「桐城文派」の影響は、同派の中興の祖といわれる曾国藩の門下の二人、すなわち一八八〇年代に二度にわたり駐日公使を務めている黎庶昌（それ以前の五年間は英・仏・獨・西駐在の清国公使館参事官を担任）およびその姻戚で直隸の名門・蓮池書院の院長を務めている張裕釗によって日本に伝わり、一部の漢学者や中等学校だけでなく、京都帝国大学というアカデミズムの重鎮にも波及した、という結論に至った。

第二章「民国初期の文学革命に対する日本知識人の反応」においては、「民本主義者」吉野作造、「道家の徒」青木正児、「桐城派文章論の推奨者」西村碩園、および在中国「慈善教育者」清水安三など四人の文学革命観を検討した。「桐城文派」の主将たちは主には安徽省の人であり、「文学改良」や「文学革命」を唱えた留学経験者の胡適と陳独秀も安徽省の人であったため、近代中国文学の草創期における文言・白話論争は安徽人同士の拮抗という様相を呈した側面もあった。白話文学に対する吉野、青木と清水の同調と西村の反論は個人の経歴や日本の国内事情と絡み合い、それぞれの思想的な立場の表明でもあった。なかでは、西村および内藤湖南・狩野直喜など「明治人」が示した反発は、「文学革命」派による伝統の破壊を危惧する中国の「学衡」派の人々の主張と呼応していた、と指摘した。

第三章「近代における「漢文直読」論の由緒と行方」では、近代において重野、青木および倉石武二郎などによって提唱されている「漢文直読」論を検討した。それは、近世の古文辞学の祖である荻生徂徠の持論だけでなく、欧米で行われている外国語・外国文学学習の一般的な順序やルールからも影響を受けていたため、学問の主張としての正当性は明らかである。にもかかわらず、第一次世界大戦後の思想界、とくに中学校漢文科廃止問題をめぐる教育界の激しい対立関係や山東還付問題をめぐる日中間の緊張関係もあり、「漢文直読」論は時には「矯激の論」と聞こえたため、青木は論文発表の延期や論題の改題、倉石は研究会での発言自粛などを余儀なくされた。このような経緯に鑑み、訓読伝統への尊重と多元文化の共存という視点から、音訓並行、音読を主として訓読を補助手段とするこれからの漢文教育のあるべき姿を提言した。

第四章「天保期の藤澤東咳から見た銭泳編『海外新書』においては、寛政「異学の禁」以降の徂徠学者の不遇について強い不満をもった東咳が、『辨名』『辨道』という荻生徂徠の代表作が『海外新書』第一輯に収録されたことが『七経孟子考文補遺』が四庫全書に収録されたこと以上に、徂徠学派の優れた学問が儒教の祖国で認められたという意味を有しているため、徂徠への奉告祭と祝宴を挙行し鬱憤を晴らした。一方、頼山陽『日本楽府』を高く評価し、日本漢文学の名作を選択的に中国の読者に紹介しようとした銭泳が「大塩平八郎の乱」を予知できないまま大塩の代表作『洗心洞割記』を『海外新書』第二輯以降に収録する計画を立てていた。この計画を察知した東咳は、銭泳宛ての密書で戒めた。江戸後期の儒学をめぐる複雑でダイナミックな諸事情、および「鎖国」下の日中人文間の文通や意思疎通の可能性と限界がこの一例に示されていると言える。

第五章「星野恒選編・王韜評点『明清八家文』について」では、まず、中国の文人に先駆けて『明清八家文』の編成（とくに、桐城派の大家方苞の「方望溪文抄」が分量的に同書のほぼ四分の一を占めていること）を試みた修史館員星野恒（幕末の大儒、昌平黌教授塩谷岩陰の弟子）の選編作業に表れたその人性・人倫重視と歴史・伝統尊重の態度を評価し、その桐城派への傾倒ぶりを明らかにした。そして、『普仏戦紀』に現れた豊かな学識と国際感覚を買われて一八七九年に日本への招待訪問を果たした王韜が星野恒の依頼により行った丁寧な評点を「方望溪文抄」を中心に検討した。と同時に、宮島誠一郎『養浩堂詩集』の評点に関わった王韜の取組みの背景を、現存している筆談資料で探った。王の結論は、日中がほぼ同文の国であるため、もし漢字の字画上や発音上の一部相違がなければ、日本漢学者の文章は明清時代の八大家と相拮抗することも難しくないはずだ、というものであった。

第六章「内藤湖南の章實齋顕彰に刺激された中国の学者—胡適・姚名達および張爾田との交流について」において、章實齋（章学誠）の学問の真価に関する内藤の発見は、その青少年時代に受けた漢学と英学の洗礼、記者時代と大学教授時代における沈曾植、羅振玉、王国維など中国人学者との交流、「欧西と神理相似たる」東洋の学問方法論の発見を求めるといった執念に帰結した。これは、富永仲基の学問の真価に関する内藤の発見とはパラレル

的な関係となっていたと指摘できる。そして、内藤が上海楽善堂書薬から購入し胡適・姚名達の羨望の的となった鈔本『章氏遺書』の由来と希少価値を考証学の方法で解明した。また、内藤が作成した最初の章氏年譜に刺激されて書かれた胡適の章氏年譜に対する内藤のコメント（胡適寄贈本における内藤の書入れ）や、内藤の要請によりその還暦論集に寄稿した張爾田（氏の『史微』という名著は内藤の推薦により大正期以降の京大文史専攻学生の必読書となったという）の内藤宛て感謝状などに対する検討を通じて、三浦梅園と王中という十八世紀日中の二大思想家の婚礼観や、「六経皆史」説をめぐる清末の思想状況を明確にした。

梁啓超がかつてその『清代學術概論』に「桐城派と章学誠」という一節を設け、この両者は行き過ぎた乾隆時代の考証学に対する反発から生まれたものであり、前者は文章学の形を取り、後者は文史論の形を取ったと論じたことがある。本論文の主体は結果的に、この両者と日本との関わりを中心に展開した論考となった。そして、桐城派に対する反発としての文学革命（白話文学の提唱）への日本知識人の賛否両論や、日本漢学の独自の問題としての朱子学・徂徠学・陽明学の相剋関係および「音読・訓読」問題をめぐる学問上の主張と政治上の配慮との闘いなどの学界の事象と生態を、社会史の手法を導入して考察した。また、以上のような日中文化交渉に対する考察は、つねに欧米、すなわち近代西洋との影響関係を念頭において行った。その意味で、本論文は本学の G-COE プログラムが開発した文化交渉学の研究方法を生かした力作の一つと言えるかもしれない。